山口市菜香亭だより

西の菜時記

平成30年12月10日発行
第50号

発行元：山口市菜香亭
指定管理者
特定非営利活動法人
歴史の町山口を甦らせる会

特　集　：　菜香亭入館者 50 万人達成・秋のイベント報告

◆山口市菜香亭：〒753-0091　山口市天花１丁目２番７号　TEL：083-934-3312　FAX：083-934-3360◆

親しくなる二人

一味の中の二人

知り合う二人

菜香亭下の間　聞多・俊輔の友情逸話を紙芝居形式で紹介

五十年もつづいた 聞多（ぶんた）・俊輔（しゅんすけ）の友情物語

山口市菜香亭には、料亭菜香亭のときに井上馨や伊藤博文が宴会し、揮毫（きごう）された書を掲げています。

また、平成30年９月29日にリニューアルオープンした十朋亭維新館の十朋亭は、英国留学から帰国したばかりの井上聞多（馨）と伊藤俊輔（博文）が、宿泊した建物です。

これらのことから、平成30年９月から12月まで、大広間下の間（展示室）で、企画展「聞多・俊輔の友情物語」を開催しました。

その企画展から二人の50年に渡る二人の友情エピソードを紹介します。

文久元年（１８６１）、聞多と俊輔は江戸の長州藩・桜田藩邸（現日比谷公園）に住んでおり、江戸で知り合いました。当時聞多26歳。俊輔20歳。

「長崎で練兵の伝習を受けたそうじゃの。ひとつして見せろ」と聞多が声をかけたのが、きっかけでした。

文久２年（１８６２）12月、高杉晋作ら長州藩の過激攘夷派が江戸の英国公使館を焼き討ちしました。

聞多と俊輔も参加。同じ一味となったことで距離が縮まっていきました。

聞多は、見どころがある者には積極的に世話を焼きたがる性格で、俊輔を英国留学仲間にひっぱりこんだのも俊輔に魅力があったからでしょう。

文久３年（１８６３）聞多と俊輔は、山尾庸三、井上勝、遠藤謹助と英国へ留学しました。いわゆる「長州ファイブ」です。上海から二人は他の三人と別の船に乗せられ、「海軍」と「航海術」の発音を誤ったせいで４カ月に渡る船旅を水夫として働かされました。仕事は厳しく体調を壊すこともありましたが、その苦労が二人の結びつきを強くしました。

活躍する二人

涙にくれる二人

がんばった二人

命がけの二人

同志になる二人

英国で勉強を始め、やっと読めるようになった英語の新聞に、長州藩が外国と戦争している記事が載っていました。攘夷を止めて開国に変えねば長州藩は滅びると、聞多と俊輔は帰国を決意しました。当時の長州藩は過激攘夷派の集まりで開国を唱えれば暗殺されるかもしれないという危険な状況でした。その決死の選択が二人を無二の親友に変えました。

聞多と俊輔は帰国するとすぐに山口に入り、十朋亭を宿としました。外国と戦争をする前で、家老らに働きかけ、山口御茶屋で藩主に謁見し、攘夷中止を訴えました。しかし今さら変更は出来ないと却下されました。

１か月後、下関で長州藩は４か国の外国艦隊を相手に戦争をしてほんの２日間で壊滅、降伏に至りました。

さっそく講和会議がもたれることになり、聞多と俊輔は通訳として参加しました。

聞多は上級武士なのでこういう重要な場に参加するのは当然ですが、下級武士の俊輔が同席するのは英国帰りだからこそで、英国留学が俊輔の出世の糸口になっていました。

外国との講和が結ばれたあと、長州藩は幕府による第一次長州征伐をむかえました。

聞多はひとり、いざとなったら幕府と戦うのもやむをえないと主張したため、湯田の袖解橋で襲撃され、50針も縫う大けがをし、一時は命が危ぶまれました。

俊輔は下関から聞多のもとへかけつけ、沈痛な面持ちで見舞いました。このとき聞多の死を覚悟したそうです。

聞多は奇跡的に回復し、第二次長州征伐に供えて、俊輔とともに長崎で武器購入に働きました。

維新政府では、聞多はまず長崎を任されました。俊輔は神戸を任され、あっというまに二人は初代知事に出世しました。肩を並べて仕事をするようになり、明治の新しい世は能力次第で出世できることを示しました。

山口市菜香亭ご利用案内その㊱

◆菜香亭市民ギャラリー出展作品紹介・予定表◆

＜市民ギャラリー出展作品の紹介＞

第2回創作展「快作楽～幕末維新をテーマに～
—NPO法人防長史楽会—　9/7～9/9

カラー魚拓展 in 山口～額の中の水族館～
—カラー魚拓山口県教室—　10/17～10/22

山口に集う神々のマスク展
—モーリのクリエイションクラブin山口　11/2～11/4

〈平成30年度　市民ギャラリーの予定〉2月

月日	時間	タイトル	主催者
2/9～10	10 時～17 時	コッコのたまご展 in 山口	SCC 桜畠クリエイターズクラブ

出展ご希望の方は、2ヶ月前までにお申し出ください。
（お問い合わせ）　TEL：083-934-3312

山口県政資料館（国重要文化財）第１部

旧菜香亭は、料亭として山口の迎賓館として親しまれていました。

特に県庁から歩いて約１０分の近くにあったので、県庁を訪れた国の役人や政治家の方々などを接待するほか、県の職員もいろんな会合で利用していました。

中でも大正５年（１９１６年）７月に建築された旧県庁舎時代が菜香亭との関りが一番多いので、３回にわたって県政資料館にスポットをあててみます。

県庁舎の変遷を見ると、旧藩庁舎（文久庁舎）が元治元年（１８６４年）に新御屋形として竣工し、以来「山口藩庁」明治４年に「山口県庁」と改称されました。この庁舎は、木造平屋建９２４坪（３，０５５㎡）で手狭であったため、明治４４年に県庁舎改築と併せて移転論議が出され、山口、防府、下関の位置問題で大論争の末、山口に改築することが決定されました。

大正庁舎は県会議事堂と合わせて、大正２年４月に着工し大正５年７月に竣工しました。この建物は国の官給建築物で、設計者は妻木頼廣（つまきよりなか一大蔵省臨時建築部長・幻の国会議事堂プラン者）、大熊喜邦（おおくまよしくに一現国会議事堂設計者）、武田五一（たけだごいち一広島県出身）の３人の国の役人が設計しました。建物の構造は、芯を煉瓦積み、外側がモルタル塗り、内側が漆喰で仕上げられ、２階建１，２３５坪（４，０７８㎡）で、建築費は県会議事堂合わせて約４０万円（現在価格に換算して約２４０億円）と言われています。

この大正庁舎も老朽化し手狭になったため、昭和５９年５月に現在の県庁舎が鉄筋コンクリート地上１５階・地下１階建１０，２８３㎡、建築費約２５０億円で新築されました。

残された大正庁舎と旧県会議事堂は当初取り壊される予定でしたが、幻の国会議事堂プラン者が設計した建物であり、西洋の近代建築様式と伝統的な日本の建築様式が融合した極めて文化性の高いモニュメント（遺産）として評価され、昭和５９年（１９８４年）１２月２８日に国の重要文化財に指定されました。

そして、昭和６０年１１月１５日から大正庁舎と旧県会議事堂を合わせて「県政資料館」として一般に公開されています。

このように旧県庁舎と県会議事堂を一体的に保存しているのは、全国的にも山口県と山形県の２県だけで、貴重な建物が取り壊されず保存され、この建物で勤務した者にとっては近代的な建物と比較してクラッシックな建物にも良さがあり保存されて良かったと思っています。

菜香亭の立ち寄りとあわせて、是非ご見学ください。（月曜日休館）